
インフィニット・ストラトス。哀れな兄、天才の弟

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス。哀れな兄、天才の弟

【Nコード】

N4735BA

【作者名】

ケン

【あらすじ】

織斑姉弟にもう一人天才の

双子の弟がいたらの話。

長女、千冬、長男、一夏、二男、真夏

この世界には二人の天才がいる。

一人はISの生みの親、篠之ノ束。もう一人は織斑真夏。

織斑一夏の双子の弟であり幼い頃から周りに天才、天才と呼ばれていた。

これはそんな物語。

「じゃ、これを織斑……あ、二人いるんだっけ、おバカな織斑」

「ははははははははははは！」「ははははははははははは！」

先生がそう呼ぶとクラスに笑い声が溢れた。

教師も面白そうに笑っておりそう呼ばれた男子生徒は

悲しそうな顔をして分かりませんと言おうとすると

別の男子に挟まれた。

「先生、俺、バカだから分かりませうん」

すると、当てられた少年が言った言葉ではないのにも

関わらず教師はそうだよな、
と言いきくクラスには再び笑い声が溢れ

当てられた少年は泣きそうになりながらも我慢していた。

「じゃ、真夏。答えてみる」

「はい、 $y = 3x + 23$ です」

「流石だな、この問題は高校入試の一番

難しい学校の一番難しい問題だったんだがな」

そう言うクラスにおおーという声があちこちから聞こえてきて
先程の少年とは全く違ふ反応が見られた。

チャイムが鳴り休憩時間、織斑一夏はトイレに行っていると

一人の女子生徒に話しかけられた。

「あ、あの真夏さんですか？」

そう言われると一夏はまたかよ、と心の中で
呟くとため息をつきながらこういった。

「俺は一夏だ」

「あ、なんだ。じゃ、いいや」

そう言うときまで恥ずかしそうに話しかけていた女子生徒は
素っ気なく一夏の横を通つていき真夏のいる教室に入つていった。
実は2人は双子で顔も一緒、身長も一緒でよく間違われることがあ
った。

「なんで俺、あいつと双子で生まれてきたんだろ」

授業が終わり集礼をしていると最後の連絡として

先生が重い表情になって話し始めると生徒達はそれを感じ取り
教室は静かになった。

「実はな、このクラスで盗みを働いた奴がいる」

先生によると昨日、部活生のカバンから財布が取られた
という事件が発生していた。しかも何件でもある。

「俺は盗みは最悪の奴がするもんだと思っている。」

正直に言ってみる。言わないと今日は全員返さんぞ」

すると周りからはブーイングの嵐であり早く言えよ〜とか
が聞こえてきた。しかし、全員の視線は一夏に注がれていた。

「目撃証言だつて出てるんだ。早く言わないと警察に言うぞ。馬鹿
織斑!!!」

「は!?!なんで俺なんすか!?!」

「現場近くでお前を見たつていう証言があるんだよ!?!?!」

「ちよつと待つて下さい!?!俺は何も!?!?!」

「よ〜し、お前ら帰つていいぞ」

すると生徒達はそくさとカバンを持ち帰つていった。

当然、真夏も女子たちに囲まれながら帰つていった。

その後、一夏は否定し続けたが先生は聞く耳持たずで
そのまま職員室に連れていかれこっぴどく叱られた。

その頃、真夏はというと……

「にしても最悪だよ〜盗むなんてさ」

「ほんと、ほんと。ねえ、真夏君、本当に

あんな奴が兄さんなの？」

「うん、ほんとだよ。血液型だつて一緒だつてさ」

「ふ〜ん、じゃ私達はこっちだから」

「うん、またね〜」

真夏は皆が見えなくなるくらいまで手を振り

全員が見えなくなるとポケットから大量のお札を取り出した。

「ふ〜。ほんと、兄さんは最高の兄さんだよ。

ま、でも盗みつても面白そうだからしたけど面白くないな。

さ〜てと欲しかった参考書でも買いに行きますか」

実は犯人は真夏だった。真夏は緻密に計画を練り上げ

部活でユニフォームなど多額の金額を持つてくるときを計算し

そこを狙って盗んでいた。しかし、何故真夏が捕まらないのか。それは、普段真夏は素行もよく盗みなどしないと決めつけていられ一方、一夏はよく喧嘩などで職員室に連れていかれているので教師のマークがきつく今回こうなっただけであった。

「ただいま……」

「あ、お帰り兄さん」

一夏が帰ってきたのは真夏が帰ってきた1時間後だった。

一夏はすぐに晩御飯の準備に取り掛かった。織斑家には

両親がおらず姉の給料が生活費の為、普段は姉は仕事に行き二人が家事をしているのだが……

もう少しで完成という所で今まで部屋にいた真夏が

一階の台所に降りてきた。

「あ、兄さん変わるよ」

「良いよ、別に」

「良いって、良いって」

真夏は無理やり交代すると炒めだした。

一夏はリビングでテレビをつけると姉の千冬が帰ってきた。

「はゝ。また、一夏は真夏に任せているのか」

「違う！！！真夏が変わるって言ったんだ！！！！」

「はいはい。分かった、分かった。お前の見苦しい

言い訳はもう聞き飽きたよ。真夏、今日はなんだ？」

「今日はね」

楽しそうに話している真夏と千冬を見て一夏は

我慢の限界だった。毎日、毎日理不尽に怒られる。

その生活に嫌気が差してきた。

「ん？どこ行くの？兄さん」

「放っておけ。また、いつものだ」

一夏は雨が降っているにも拘らず外へと飛び出していった。

「はあ、はあ、はあ」

「どうしたんだよ!!……真夏?」

「一夏だ……」

「あ、わ、悪い。上がれよ」

彼の名は弾。一夏の唯一の友人である。

一夏は弾に風呂を借りて体を温め服も借りた。

「弾だけだ。俺にやさしいのは」

一夏はお礼を言おうと弾の部屋に入ろうとすると

声が聞こえてきた。どうやら電話をしているみたいだった。

「ああ、ああ、来たよ。でも、お前の推理はすげえな『真夏』」

「!!!!!!!!!!!!!!」

「ほんとだよ。あいつに俺は友達だって

言ったらコロッと騙されてるしさ、お前とは大違いだよ」

それを聞いた一夏は急いでまだ、乾ききっていない

自分の服を取りだし再び雨の中へ飛び出していった。

「はあ、はあ、はあ」

一夏はどれだけ走ったか分からないが結構

遠くの方にまで来たと思われる場所で泣き叫んだ。

「ああああああああああ!!!!!!」

なんで！！！！何でいつも俺はあいつと比べられんだ！！！！！！
なんでなんだよ！！！！！！……もう嫌だ、死にたい」

「そんな悲しい事言わないで」

一夏は誰だと思いつく上を向くと一夏は言葉を失った。

まるで空のように青い髪色に服の上からでも分かる

豊かな胸、学校帰りなのか制服を着ており

まさしく女神と言っているほど美しかった。

一夏はその瞬間、ああ、これが一目ぼれか、と思った。

さつきから鼓動がうるさくて仕方がないのだ。

「死にたいなんて悲しい事言わないで。この世界には

生きたくても生きれない人たちがたくさんいる。その人たちの

分まで生きないと罰が当たっちゃうわよ」

「でも、俺は生きる希望がない」

「だったら私が希望をあげる」

少女はにつこりと一夏に対して笑みを零した。

「あ、貴方は」

「私は更識楯無、貴方は？」

「俺は織斑一夏」

こうして一夏は楯無に拾われ再び生きる希望を与えられた。

インフィニット・ストラトス。天才の弟、哀れな兄、続くかも

（後書き）

こんばんわ!!!!ぱっと思いついたので書いてみました。
では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4735ba/>

インフィニット・ストラトス。哀れな兄、天才の弟

2012年1月13日00時58分発行